シーアイ社と佐伯広域森林組合は、造林用資材を運ぶ林業用ドローンを開発しました。

林業 ドローンで省力化

シーアイ社と佐伯広域森林組合が開発

シカの食害防護ネットを運搬する林業用ドローン

ドローン（小型無人機）事業を手掛けるciRobotics（シーアイロボティクス・大分市、小野俊二社長）と佐伯広域森林組合（佐伯市、戸高寿生組合長）は造林用資材を運ぶ林業用ドローンを開発し、5月以降に販売を開始する。作業の省力化によって就業環境を改善し、林業のイメージアップにもつなげる狙い。林業分野でドローンを実用化するのは県内で初めて。

県内では戦後植えられたスギ、ヒノキが育って伐採の時期を迎え、国内の木材需要も上昇傾向にある。それに伴い再造林事業も増えているが、現場では作業員の高齢化が進行。「きつい、危険」といったイメージから若い世代の就業は伸び悩み、担い手不足が深刻化している。

15キロの資材 3分で190メートル運搬

林業用ドローンは、シーアイ社と同組合が2018年度から共同で開発を進め、林業に特化した機体に改良を重ねてきた。本体とバッテリー合わせて30キロと大型で、1回に約15分間飛行できる。

3月初めに佐伯市青山の山林で実証試験があり、造林に使うスギ苗木（6キロ）とシカの食害防護ネット（15キロ）をそれぞれ上方110メートル、水平距離で190メートル離れた場所へ2～3分で運んだ。人力なら1時間分を1日で運搬する場合、苗木は7人、ネットは13人が必要。ドローンを導入することで苗木は4人、ネットは3人だけで作業ができるようになるという。

販売先は県内外の森林組合や林業関係の事業体を想定している。シーアイ社の増森啓太朗主任は「今回の試験で飛行の安定性が確認できた。販売開始へ向け、自動飛行の精度をさらに上げていきたい」。

同組合の戸高組合長は「開発当初と比べ動きがずいぶんと良くなった。林業には大変な作業が多い。負担を減らすことができるドローンが広く普及してくれれば」と期待している。

（小松和茂）

2020年4月8日付大分合同新聞22面

① 林業用ドローンはどんな目的で開発されたのでしょうか。

作業の省力化によって就業環境を改善し、林業のイメージアップにもつなげる。

②ドローンが1回に飛行できる時間は？

15分間

③人力なら20人が必要な苗木とネットを運ぶ作業を、ドローンを使えば何人でできるようになるでしょう？

7人

④あなたならどんなことにドローンを活用しますか？　考えてみましょう。

空撮、測量、点検、配送、農薬散布など、自分なりのアイデアを書きましょう